黒狼の可愛いおヨメさま

ろいず

ROIZU

Noche

ノーチェ文庫

登場人物紹介

ビビアット

【女帝】という称号を持つ
Sランク冒険者で、
凄腕のトレジャーハンター。

シュテン

狐の獣人で、メビナ・タマホメの兄。
刻狼亭で働いており、ルーファスの
右腕的存在でもある。

ハガネ

貉（むじな）の獣人で、アカリの魔法の先生。
元々、刻狼亭の従業員だったが、
事情があってしばらく身を隠していた。

メビナ／タマホメ

刻狼亭で働く狐の獣人の双子。
見た目は幼女だが…？

ルーファス

料亭・旅館を営む「刻狼亭（こくろうてい）」の主人。
狼の獣人で、アカリの番（つがい）。
とにかくアカリのことが可愛くて仕方がない。
若い時は冒険者として活躍していたらしい。

三野宮朱里（みのみやあかり）（アカリ）

アルバイトで生計を立てる、18歳の少女。
孤独でつらい人生を歩んでいたが、
ルーファスと出会い、「番（つがい）の儀」をすることで、
新たな人生を歩むことに。

目次

黒狼の可愛いおヨメさま　7
書き下ろし番外編
二人の家族　361

黒狼の可愛いおヨメさま

第一章

あー……、これは駄目なヤツだなって思ったのは、車に撥ねられたあとにボンネットに打ち付けられて、そのまま地面に転がった瞬間。

助かるだろうか？　無理だろうなー……そんなことを思っていたら地面に吸い込まれる感覚があった。ああ、このまま死ぬんだなって思って、私はそっと目を閉じる。

「……どういうことだ！」

「そんな……召喚魔法の負荷に耐えきれなかったというのか？」

「これであと百年は【異世界召喚】などできないのに、なんてことだ……」

ざわざわと、自分のまわりで複数の人の声がした。

なんだろう？　意味のわからない言葉が投げかけられているけど、体が痛くて話に集中できない。

「仕方がない……もう助からんだろう。捨て置け」

そんな無慈悲な言葉のあと、私は荷物のように全身を布で巻かれてどこかへ運ばれ、捨てられた。

（私が今ここで死んでも、誰もなんとも思わないんだろうな……）

孤独なのにはもう慣れているけど、車に撥ねられて、救助もしてもらえず捨てられて……私は誰にも知られないまま死んでいくんだ……

いつの間にか巻かれていた布はどこかへ行き、冷たい土と草の香りを直接感じていた。どうやら森の奥らしく、聞こえるのは木々の騒めく音と複数の動物の鳴き声。

体中が痛い。顔も腫れ上がっているのか、うまく目が開けられない。

（まだ、生きている……でも痛みで動けない……）

何時間そこで意識を飛ばしては戻ることを繰り返しただろう？

ガサガサという、草を掻き分けるような音が段々と近付いてきた。

動物の足音だろうか。私は動物に齧られて死ぬのかな？

ぼやける視界に現れたのは一つの人影。その人影が必死に話しかけてくる。

（ごめんなさい。私、喋れないよ……そんな力残ってない）

「頼むから死なないでくれ。オレの、オレの唯一」

今にも泣き出しそうな声でその人は呟いて、壊れ物を扱うようにそっと私を抱き上げ

てくれた。
（温かいね……ありがとう。なんだかとても安心する）
そのままどこかへ連れていかれた。
とろとろとした睡魔と現実に戻る痛みが混濁する中で、その人の声だけが心地よかった。
「大丈夫だ。きっと良くなる。大丈夫だ」
何度も呟く声は優しく力強いのに、どこか不安そうだ。たまに上から温かい雫も落ちてくる。
（涙……？　私には泣いてくれる人なんてもういないはずなのに。私のために泣いてくれるの？）
独りぼっちの私の最期に泣いてくれる人がいるなんて、幻覚でも見てるのかな？
ふっと意識が覚醒して目を開けると、金色の目が私を見ていた。
（なんて綺麗な目……心配そうに瞳が揺れている）
「目が覚めたか？　大丈夫か？」
（ああ、この優しい声はあなただったの）
口を開けようとしたけれど力が出ない。小さく指を動かすと優しい声の彼は私の手を

取り、自分の頬を擦り寄せた。
「もう大丈夫だ。オレがいるから、オレの番」
（つがい……？）
またとろとろとした睡魔がやってきて、瞼が落ちる。
「今はたくさん寝て、早く治れ」
（そうだね……でも、治るのかな？　多分、重体だと思うんだけどな）
車に轢かれた時に、骨の砕ける音が体の何ヶ所かでした。おそらく治ったとしても元の生活には戻れないだろう。
私の世話をしてくれる人なんて誰もいないから、遅かれ早かれ、私は死んでしまうだろうな。
仮に生き延びてもずっと孤独なままだろうし、大人しくここで家族のもとへ逝く方が幸せかもしれない。
そう思いながら、私は眠りに落ちていった。
しばらくして、また覚醒して、目を開けると見知らぬ天井が見えた。
「ここは……どこだろう？」
ぼそりと呟くと横から声がした。

「ここはオレの家だ。もう起きて大丈夫か？」
あの声の主が横にいた。黒髪で二十代くらいの、着物を着たイケメン……の頭に動物っぽい三角耳が見える。
（まだ私、寝ぼけているの？）
黒いケモ耳がピコッと動いた。しかも、イケメンの後ろで、黒いふさふさとした尻尾がフリフリと動くのが見える。
（いやいや、まさか……ね？）
「どうした？　まだ具合が悪いのか？」
「いえ、あの私……」
ケモ耳を付けた黒髪金眼のイケメン。コスプレにしては出来が凄いのですがどうしたらいいですか？　とは、さすがに聞けないし、言えない。
悩んでいる間も、パタパタと動いている黒い尻尾をどうしても目で追ってしまう。
「オレの番は声が可愛い」
彼はそう言って嬉しそうに目を細める。
「一応、体力が戻ってからでないと回復ポーションが使えなくてな。もう大丈夫だと思うんだが」

回復ポーション……？　うん？　わからない。
少し体を起こして、首を傾げながら彼を見上げてみる。
彼は困った顔をして目を逸らした。
「番のしぐさが可愛い……ヤバいなこれは」
何がヤバいのかな？
そう思いながら彼と目を合わせた瞬間、噛みつくような口づけが私を襲った。
「……んっ、んっ」
ぬるっとしたものが舌に絡みついて、悲鳴を上げそうになる。けれど舌の奥まで吸われて、声が出せない。心臓だけがバクバクと音を立てていた。
「んっ、ふぁっ……」
ようやく離れた唇からは透明な糸が引いていた。
「番とのキスは甘いな」
満足そうに彼は言うと、私の手を取る。
息が上がって頬も熱い……
「オレはルーファス・トリニア。君の名前は？」
「私、朱里……三野宮朱里」

少しぐったりした私を抱き寄せて、彼――ルーファスは耳元で囁いた。
「アカリ。オレの可愛いアカリ。もう離さない」
優しい声に背中がゾクッとする。同時に胸がトクンと跳ねた。
（私のファーストキスが……いや、それはおいといて、この人は私をどうするんだろう？私のために泣いてくれた……のだから、悪い人ではないよね？）
ルーファスは机の上の紙に何かを書くと、フッと口元を緩めて笑い、「アカリか」と声に出して頷いた。そして私を引き寄せたかと思うと、お尻の下に腕を通して、子供みたいに座った姿勢のまま抱き上げる。
その時、初めて自分が白い薄地の着物を着せられていることに気付いた。
（着物の下に着る襦袢……っていうものだったかな？）
「小さいし、軽いな。アカリ……何か食べるか？」
「むぅ……」
（小さいは余計だけど、ご飯を買いに行く途中に車に撥ねられたから、お腹は空いたなぁ）
「どうした？　アカリ」
ルーファスは優しく笑いかけてくる。思わず目を逸らすと黒い耳が視界に入った。
「ルーファスさん、耳……」

「ん？　耳がどうかしたか？」
「触っても、いいですか？」
「構わないが、オレもアカリの耳を触っていいか？」
コクリと頷くと、ルーファスは嬉しそうに頭を寄せてくる。私はおそるおそる手を伸ばした。
さわさわ……
（こ……これは本物なのでは？）
「アカリ、オレの番だ」
そう言ってルーファスは私の耳をこりこりと弄りながら歩き、部屋の扉を開ける。
ドアの外は、豪奢な和風料亭を思わせる造りをしていた。黒を基調としたそこは、どこかレトロで、明治時代の木造建築を彷彿とさせる。
広い廊下に並ぶ黒い柱は、中国の装飾を取り入れたような造りで、金色の枝と葉に花が巻き付く装飾が施されていた。
天井には黒い枠組みで仕切られた四角い絵が並ぶ。絵は幻想的な華や蝶が描かれ、不思議なことに瞬きをすると少し動いて見えた。
さらに天井付近には、【刻狼】という文字が白色で書いてある丸くて黒い提灯が並ん

でいる。
黒く艶やかな木造りの床には、黒大理石のような四角いパネルがところどころ埋め込まれており、ルーファスが歩くと、それが小さく光って足元を淡く照らし出した。
「ようこそ、アカリ。オレの城、【刻狼亭】へ」

ルーファスに抱き上げられたまま、私はその建物――【刻狼亭】の中を進んでいく。
「あの【刻狼亭】はお宿か何かですか？」
「宿は別館だな。ここは本館で料亭をしている」
建物内では、鶯色の着物に白いエプロンをした女性従業員がせわしなく働いている。
「ルーファス、それ誰？」
「ルーファス、それ何？」
和風のメイドドレスを着た、おかっぱ頭の幼女二人が私を指さしてくる。二人共山吹色の狐耳で、顔立ちもそっくり。きっと双子だろう。
「この子はアカリ。オレの番だ」
嬉しそうに私の頭に頬を擦り寄せるルーファスを、幼女二人は驚いたように見つめる。
「ようやく春がきた？」

「長い冬は終わった？」
ルーファスが「ああ。ありがとうな」と言って、二人の手の平に飴玉をのせる。二人は「おっしゃ！」「よっしゃ！」と言って、あっという間に走り去った。
なんと素早い幼女だろう。少し驚いて二人が消えた廊下を見つめる。
「あの、ルーファスさん。『つがい』ってなんですか？」
私の問いにルーファスは少し目を細め、「唯一だ」と呟く。
「替えのきかない魂の半身。番は魂の安らぎ。一度手に入れた番を手放せば魂が壊れる。アカリ、君はオレの番だ。わかりやすく言えば嫁だが、番は最大の愛の伴侶だ」
「魂……？　嫁……？」
（色々言われたけど、嫁……ううん？　嫁って、結婚相手の嫁で合ってるのかな？）
コテンと首を傾げると、クククッとルーファスは喉を鳴らして笑う。
「いずれわかる」
ルーファスに連れられて料亭の一室に入る。すると目の前に広がっていた十畳ほどの部屋が四畳ほどに縮小され、並んでいた黒いテーブルと椅子も数が減った。
「え？　これどうなってるの……？」
「人数に合わせて魔法で部屋の大きさやテーブルの大きさ、椅子の個数などが変わる仕

組みになっている」
「ふぁっ!?　魔法……？」
　思わず変な声を出すと、ルーファスは目を細めて笑い、私の頭を撫でて椅子に座るように促す。
　黒い円卓に向かい合って座ると、お腹が「くぅ～」と鳴った。恥ずかしさで赤面する私を、ルーファスが楽しそうに見つめている。
「急にガッツリとしたものを食べて胃が驚くといけないから、粥系のもの中心でいいか？」
　その言葉に私は慌てて自分の体をペタペタ触り、次いで首を振る。
「あの、私、お財布ない……多分、元々着ていた服の中か、トートバッグの中……」
　そういえば私の荷物、どこにいったんだろう？　森に捨てられた時に、他にも何か投げ捨てるような音がしたから、一緒に捨てられた可能性が高い気がする。
「アカリの近くにあったカバンなら、念のため拾って保管してある。だが、服にもカバンにも、財布のようなものは入っていなかったぞ」
　車に撥ねられた時に、財布も携帯もどこかに飛んでいってしまったのかもしれない。お財布の中には銀行のキャッシュカードも入っていたのに……私、完全に無一文なの

では？
　ショックを受けているにもかかわらず、私のお腹は再び「くぅ～」と鳴った。
「気にするな。オレの店だ。番のアカリから金は取らないさ」
「でも……」
　ためらっているとルーファスが口元を緩ませて笑い、「可愛いな」と呟いた。
　そして、テーブルの奥にある紐を引っ張り、従業員の女性を呼ぶ。ルーファスが注文をしている間、私は大人しく座っていた。
「私がどうしてここにいるのか、聞いても？」
　女性が部屋を出ていったあとで、尋ねた。
（車に撥ねられた後に、人が多い場所にいた気がする。そして捨てられたのはなんとなくわかる）
「ああ、アカリはここから西にある大陸の、人族が暮らす国――タンシム国の【異世界召喚】でこちらの世界に連れてこられたようだな」
「異世界召喚……？」
　それって、地球とは別の世界に連れてこられちゃったってこと……？
　確かにここが元いた世界とは違うのはわかる……ルーファスの耳とか尻尾もそうだし、

魔法にいたっては、御伽噺もいいところだしね。
「アカリが着ていた服がこの世界にはない技術で作られていたから、そう判断した。……アカリはこの世界の人間ではないだろう？」
私が着ていた服はジッパーのあるパーカーにジーンズだったはず。この世界にはジッパーとか、ないのだろうか？
「多分、この世界の人間じゃないとは、思います……」
ルーファスが頷いて、私の髪を撫でながら話を続ける。
「この世界には【異世界召喚】の魔法があり、時々実際に行われる。だが……おそらく、アカリは大怪我を負っていたためにすぐに死んでしまうと思われ、森に捨てられたのだろう。人族は魔法が得意ではないからな。特に回復魔法の使い手は、人族にはほぼいない。薬草も高価で品薄だ。アカリに価値があるかわからないのに使えなかった……というところだろう」
（ああ、やはり「捨て置け」と言われたのは現実だったのか……私は、どこにいても邪魔者なんだ）
そう暗い気持ちになってしまう。
「ルーファスさんは、なんで私を拾ってくれたの？」

「それこそ愚問だ。自分の番の匂いがすれば、たとえ地の果てでも迎えに行くさ」
ルーファスはそう言って笑うと、私の頭に手を回し、引き寄せてキスをした。
「……っ、あの、なんで、キスするの？」
「アカリ、君が好きだから。君に惹き付けられてる」
その声の優しさと艶めいた物言いに、思わず喉がゴクリと鳴った。
「お待たせ致しましたー」
ちょうどその時、料理を持った女性の従業員が入ってきた。「残念」と言って、ルーファスが離れる。
「食べるか」
そう言われ、ルーファスと一緒に料理に口を付けた。
（お魚のお出汁が胃に染みる……人と一緒にご飯を食べたのはいつぶりだろう……？）
ぽろりと涙が零れると、ルーファスが私の頭を優しく撫でてくれる。
「慌てなくていい。ゆっくり食べろ……」
詳しいことは聞いてこないルーファスの優しさに、涙が溢れて止まらなかった。
食事の間、私が鼻をすする音と食器の当たる小さな音だけがしていた。
「ご飯が温かいのも、人と食べるのも、三年ぶりかも……」

そう呟いた私に、ルーファスは先程と変わらず優しい目を向ける。
私の家族は今はもう一人もいない。
十八歳の私は月二万五千円、築三十五年のボロアパートに住み、アルバイトをするだけの日々。
「これからは、オレやここの従業員達が毎日一緒だ。食事も一緒にとれるぞ」
「……それは、私をここで雇うって、ことですか？」
「いいや。店に出てもらうことはあるかもしれないが、雇うというわけではない。ただ、ここで暮らしてほしい。嫌か？」
「私が元の世界に帰るまで、保護してくれる……と、いうこと？」
「アカリは元の世界に帰りたいのか？　誰か待っている人がいたりするのか？」
私は首を横に振る。私には元の世界に何もなかったから。待っている人もいないし、居場所もない。
「残念ながら、アカリは元の世界には帰れない。【異世界召喚】の魔法はあるが、帰す魔法は聞いたことがない。仮に帰れたとしてもオレが連れ戻す。オレと一緒にここで暮らしてくれるだろう？」
優しい声色なのに有無を言わさない言葉。

「あり、がとうございます……ぐすっ」
何故この世界に召喚されたのかはわからない。でも、私のことを必要としてくれる人がいるのなら、ここで生きていきたい。
またぼろぼろと溢（あふ）れ出した涙を、ルーファスが指で拭（ぬぐ）ってくれる。
「泣くな、アカリ。オレはアカリが笑ってくれたら嬉しい」
ルーファスの言葉に私は泣きながら笑ってみせる。少しぎこちない笑顔になってしまったけれど。

食事が終わると、ルーファスは再び私を抱き上げて歩き出した。
【刻狼亭】の外に出ると、まるで温泉街のような風景が広がっていた。
旅番組の老舗（しにせ）旅館特集で見るような街並みで、建物がどことなくレトロ。和風建造物に似ているけれど、少し違っていて、お土産屋（みやげや）のようなものもあれば、江戸時代風の茶屋のようなものもある。
道路の両脇には小さな川のようなものが流れている。湯気が立っていて、そこに人が腰かけ、足を入れているから、足湯なのかもしれない。
心地いい風が吹いて、私の腰まである髪が空を舞った。

「どこに行くんですか？」
「ああ、さっき言っていた別館だ」
カロンコロンと小さな下駄の音と人々の声が響く。
（異世界ってファンタジーっぽい世界なのかと思っていたけれど、洋風じゃなくて和風なのがなんとも言えずにいいな）
そんなことを思いながら、再び口を開く。
「ルーファスさんは何者なの？」
「オレか？　ただの【刻狼亭】の経営者だ」
「いえ、お耳があるので……」
「ああ、オレは狼の獣人で黒狼族だ」
（犬じゃなかった！　狼って凶暴なイメージがあるんだけど……）
思わずビクッとして、ルーファスに笑われてしまった。

黒くて高い建物が聳え立つ。大きなホテルにも見えるその場所は、黒塗りの土壁に囲われていて、広い入り口には【刻】と白文字で書かれた黒い暖簾がかかっていた。
暖簾をくぐると、赤い絨毯の敷かれたロビーが広がる。

「若、お泊まりで？」
【刻】と背中に印字してある着物を着た、蛇のような顔をした男性が声をかけてくる。
「ああ、薬湯のある部屋にしてもらえるか？」
「へい。なら最上階の部屋が空いていますから、そこでいいですか？」
「ああ。あと、この子に合う服を見繕っておいてくれ」
「若、確か二十四歳でしたよね？　こんな小さな子に手を出すなんて……」
「……この子はオレの番だ。変なことを言うな」
「おっ、そりゃお祝いですね。よかったです」
男性に鍵をもらうと、ルーファスは私を抱き上げたまま昇降機に乗り込む。
昇降機が昇り始めると、背筋がゾワゾワして、思わずルーファスの着物の衿を握ってしまった。
「アカリは高いところは苦手か？」
コクコクと上下に首を振ると、ルーファスがギュッと強く抱きしめて背中を撫でてくれた。
「怖い時はオレにいつでも抱きついていいからな？」
さすがにそれは恥ずかしいけれど、衿を握ってしまったので何も言えない……

最上階で昇降機を降りると、ホッと息をつく。
連れてこられた部屋は、入ってすぐのところが洋室の応接間になっていて、奥に和室と寝室。さらにベランダに露天風呂があった。
ルーファスが私を下ろしてお風呂場に手招きする。
「薬湯の温泉だ。まだ回復ポーションで治っていない打ち身もあるだろうから入るといい」
ルーファスは私の頭を撫でると「ゆっくりしておいで」と言ってお風呂場から出ていく。
その場に残された私は少しためらったあと、着物の帯に手をかけて脱いでいく。
「……っ!?」
(私、下着、穿いてない……!)
ひぇぇっと思いつつ自分の体を見下ろすと、黄色い痣ができていた。
内出血の痕かな？　青い痣もまだある。
(派手に車に轢かれたはずなのに……生きているのが不思議)
かなりの重体だったと思うのだけど、さっき言ってた回復ポーションというもののおかげなのかな？
ぽちゃりと音を立てて温泉に体を沈める。

「ううっ、染みる……」
黄色く濁った薬湯に浸かって目を細めていると、後ろで声がした。
「アカリ、湯加減はどうだ？」
なんとルーファスが裸で入ってきた。一瞬呆気にとられ、慌てて胸を手で押さえる。
「あの……」
「ん？　隠さなくてもいいぞ」
(いやいや、あなたは隠してください!!　そして私は恥ずかしいのですけど!?)
顔を赤くして硬直していると、ルーファスが温泉に入り、私の側に座った。
「アカリは物静かなんだな」
「あんまり、喋る相手、いなかったから……」
(心の中では大騒ぎしてますけどね……)
「そのうち気軽に話してくれると嬉しいな」
そう言ってルーファスは後ろから私を抱きしめてきた。今の私は茹でダコ並みに真っ赤になっているに違いない……
(しかし、何かが背中に当たっているのは気のせい？　気のせいだよね……？)
「やはりアカリの体はまだ回復しきっていないな」

私の腕を取って、ルーファスが黄色い痣をジッと見る。見上げると、彼は少しだけ困った顔をした。

（心配しているみたいだし、大丈夫……だよね？　変なことしたり、しないよね？）

「あの、私、お風呂、先に出ましょうか……？」

「いや、いい。アカリの体が完治してから『番の儀』をしようかと思ったんだが、今やって生命力を分けた方が治りが早そうだ」

「『番の儀』……？　って、なんですか？」

「『番の儀』というのは番同士が番う儀式のことだ。今、アカリは飯を食って湯に浸かっても体温が低いままだ。おそらく生命力が足りていないのだろう。儀式をすればオレの生命力をアカリに分け与えられ、体の回復が早くなる」

「生命力……ですか？」

コテンと首を傾げると、ルーファスが頷いた。そして私の手を握ってくる。

「それに『番の儀』をすると、番同士、相手の持っている能力を使うことができるようになる。例えば、オレが覚えている魔法はアカリもそのまま使えるようになる。もしアカリがこれまで魔法を使ったことがないのなら、練習が必要になるだろうが。この世界では魔法が使えた方が何かと便利だからな」

（『番の儀』……は、よくわからないけど、魔法が使えるのは素敵かもしれない）

コクコクと私が頷くと、ルーファスの顔が近付いてきた。唇と唇があたって体が硬直する。思わず目と口をギュッと閉じると、唇が離れた。これが『番の儀』なんだろうか……？

「終わりました？」

「いや、これからだ。そんなに怯えなくていい……と言っても、初めてのアカリには怖くて当たり前か」

（ううっ……何をするつもりなんだろう？）

温泉の湯面に雫が音を立てて落ちる。

困惑した目で見つめると、ルーファスは優しく笑った。

「オレのことは嫌いか？」

「えっと、まだよくわからないですけど、嫌いじゃ、ないです」

「『番の儀』をすれば、オレが魂の半身だと理解できる。アカリは人族だから嗅ぎ分けられないだろうが、オレ達獣人は自分の番の匂いを嗅いだだけで胸が切なくなって痛くなる」

ルーファスが私の頬に手を当てて、少し泣きそうな顔をする。

「アカリを森で見つけた時、自分の番だとわかって嬉しいと同時に、アカリが死んでしまうんじゃないかと気が気じゃなかった。アカリが回復していくにつれ、オレは嬉しくてアカリを抱きしめたい衝動を抑えるのに必死だった。アカリはまだ触っていいほど回復していなかったからな」

ルーファスはそう言うと私を抱きしめ、肩におでこをくっつけて「治ってくれてよかった」と安堵の声を漏らした。

「あの、泣かないで……？」

「泣いてない。でも、アカリにこうして触れているのに、不安が尽きない」

「『番の儀』っていうのをしたら、少しは不安が治まりますか？」

「少なくとも、今よりかはアカリに生命力が付くから安心する」

「なら、私のためでもあるから、その儀式をしてください」

「なるべく、優しくする」

どんな儀式なんだろうとジッとしていると、ルーファスが胸を隠していた私の腕を解いた。思わず体がビクッと揺れてしまう。

（生命力って言うから心臓が関係あるのかな？　でも恥ずかしい……）

ルーファスが胸に吸いつき、温かい舌で胸の頂を円を描くように舐めてくる。

「ひゃっ……」

「アカリの体は小さいのに胸は大きいな。アンバランスさがそそる」

「……んぅ、余計な、お世話……っ」

「オレは褒めているつもりだが」

「褒めて、ない……っ、んっ」

もう片方の手が左胸を揉み上げた時に、あれ？　心臓は左なのになんで吸われてるのは右なんだろう？　と思った。

不安がどんどん広がって、思わずルーファスの顔を両手で突っぱねる。

「あの、待って！『番の儀』って何するの……？」

「アカリのココにオレの体液を流し込む」

ふにっと下腹部を手で押されて、さすがの私も『番の儀』が何かを理解した。

フルフルと頭を横に振ると、チュッと音を立てて目から溢れた涙を吸い上げられ、優しく抱きしめられる。

「理解していなかったのか？」

頷く私に、ルーファスは眉尻を下げて小さく笑い、「仕方のない番だな」と瞼の上にキスをした。頬や首筋にも這わせるように唇を滑らせていく。

耳を軽く噛まれて吸われるとゾクゾクして「あんっ」と甘い声が出た。
「やめておくか？　オレは早くアカリの体を回復させたいが、アカリの気持ちの方が大事だからな」
「あぅ……、や、優しくしてくれるなら」
流されちゃいけない気もするけど、でも出会ったばかりなのにルーファスに強く惹かれている自分もいる。
独りぼっちの私と一緒にいると言って、一緒にご飯を食べてくれる。何より私と一緒に暮らしてくれると言った。
上目遣いでルーファスを見ると、金色の目が優しげに細められた。何度も角度を変えて啄むようなキスが繰り返され、息苦しさに「はふっ」と口を開ければ、また唇をふさがれる。息苦しくてドキドキしているのか、キスでドキドキしているのかがわからなくなる。
「アカリ、そんな顔をするな。手加減できなくなる」
「ふぁ……？」
（そんな顔って、どんな顔を私はしてるんだろう？）
再びキスをされて、ルーファスの優しくて大きい手に胸を揉み上げられる。彼の手に

収まらない私の胸が、やわやわと揉まれて形を変えていった。
「アカリの胸は吸いつくようにしっとりしていて、柔らかいな」
「んっぅ、恥ずか、しい、よ」
揉まれた胸の頂はツンと立っている。それが恥ずかしくて胸を手で隠そうとしたら、阻止するように手を取られ、甲にキスされた。
「アカリの全部を見せてくれ。隠すなんて駄目だ」
「んっ、やぁっ……おっぱい弄っちゃ、やだぁ」
胸の尖りを指の腹で摘まれてグリグリと弄られると、胸はピリピリするし、お腹の下の方も押されているような、変な感じがし始める。
「んっ、んっ、お腹、変……やぁっ」
ルーファスにそう訴えると胸から手が離れた。少しホッとしたような、残念なような気がしていたら、その手が下半身に伸びて、誰にも許したことのない秘部へ滑り込み、花弁を開いて蜜口に指を挿入してくる。
「ひゃぅっ」
ビクンッと腰が浮くと、もう片方の手で引き戻された。
「やぁ……私、初めてなの！　だから、だから……」

「ああ、痛くないように、よく解しておかないとな」
ルーファスの大きくて長い指がゆっくりと入ってきて、異物感と痛さで涙がぽろぽろ零れた。しゃくりあげるたびに、彼は指の動きを止めてキスをしてくる。舌が私の舌を吸い上げ、口の中が甘く蕩けるような感覚に胸がきゅんとすると、蜜口に入っていた指がまたゆっくりと動き出した。
「あっ、きゃぅ」
さっきまで異物感と痛みしかなかったのに、今はルーファスの指が動くたびにおへその下あたりがズクズクと鈍く疼く。
蜜口に指をもう一本増やされて、蜜孔を広げては中を指の腹でゆっくりとなぞられ、抜き差しを繰り返される。
「あ、あっ、いやぁ、ルー、ファスさ……」
体が勝手にビクビクとし始めると、露天風呂の縁に座らされた。
（何を、する気……？）
片足をルーファスの肩にのせられ、気付くと誰にも見られたことのない場所を曝け出していた。
秘所にルーファスの顔が近付いたかと思うと、蜜口を舐められる。

「きゃうっ、やめてぇ！　汚いから、やめっ」
「アカリ……オレの可愛い番」
「――っぁ、ゃ、やだぁ……そこ駄目ぇ……っ」
羞恥に涙が溢れてくる。頭を左右に振ると、ルーファスはわざと音を立てるように蜜口を舐め、指を出し入れした。
ルーファスの指に少し浅い場所を擦られ、ビクンッと体が震えてしまう。すると、執拗にそこを攻められ、声にならない悲鳴が口から漏れた。
「――っ」
「ああ、ここがアカリのいい場所か」
肉壁を擦られ、内部がギュウギュウとルーファスの指を締め付ける。
駄目だと思うのに、体が勝手に刺激を欲しがって腰をくねらせてしまう。
やがてわけがわからなくなってビクンッと体が揺れると、頭が真っ白になった。
「ぁぁぁーっ⁉」
何が起きたのかわからず、くったりとして肩で息をする。
「アカリ、ご褒美だ」
（ご褒美？　なんの……？）

見ると、ルーファスの雄が猛り、立ち上がっていた。彼が私の両足をM字に割り、蜜口にそれを押し付ける。

「いやぁ、怖い……はぅっ……」

涙声でいやいやと左右に首を振ると、優しい声色で囁かれる。

「大丈夫だ。力を抜いてオレに身を任せろ」

その声に胸がドキッと跳ね上がる。初めて聞いた時から心地いいと思っていた彼の声。おかげで少しだけ怖さが薄らいだ。

ずにゅっと先端が挿入される。無理やり広げられる引き攣れた痛みに、今まで下腹部に広がっていた快感のような何かはどこかへ飛んでいってしまった。

「ひぅぅ、んっくぅ、やぁ……」

狭い膣道は異物を押しとどめようとするけれど、強引に入り込まれてしまう。

「い……っ、たいよ……痛いっ……」

「まだ、先端だけだ。怖がらなくていい」

先端……？　こんなに痛いし、いっぱいいっぱいなのに？

「うーっ、あっ、ぐぅ……、痛い、痛いの」

息苦しさのあまり呼吸が難しくなってしまった私に、ルーファスは言う。

「アカリ、息を吸うんじゃなくて、吐くんだ」

（息を、吐く？）

言われるままに息を吐くと、ルーファスの雄がさらに深く侵入した。

一瞬、何かが侵入を押しとどめる。だが、次の瞬間、ルーファスの先端がそこを突き抜けると、あとは滑るように奥に挿入っていった。

「あ……っ」

「アカリ、これでアカリはオレのものだ」

ルーファスの形のいい唇が弧を描く。

下半身が痛みに疼く。まるでそこに心臓があるようにドクドクと脈打っていた。

「お願……早く……」

（満足したなら、早く抜いてほしい）

「ああ、オレの番はおねだりができて可愛いな」

ズンッとルーファスに強く穿たれた。

「あああっ！　ひっ、あっ、あっ」

（違ーう!!　早く抜いてってことだったのにぃぃっ!!）

ルーファスが腰を動かすたびに、自分の体の中に変な疼きが広がる。

痛さだけがあった下腹部にもきゅんっとした疼きが走った。
「あ、んっ、んっ、やぁ、あっ、あああっ」
心の声とは裏腹に、私の口からは甘い喘ぎ声が上がる。
（お腹の中がおかしい。苦しいのに、変）
最奥を突かれるたびに何かがクル感じがする。
「あっ、ルーファスさ、もっとぉ……あんっ、んっ」
（わかんない。気持ち、いい……？）
「っ、ヤバいな、番と番うのがこれほどの刺激だとは」
「あっ、もぉ、駄目ぇ、あっ、あっ、駄目っ」
お腹の奥がギュッとして何かが突き抜けそうになる。力を入れて抗おうとすると、余計にそれは強まった。我慢できなくて体が弓なりになった瞬間、それが弾けた。
「きゃううっ！」
絶頂の波に呑まれて震えていると、ルーファスの腰の動きが速まる。そして動きを止めると、ブルッと身震いして最奥で熱い飛沫を放った。
熱く広がるそれに、まるで『探していたもの』がようやく見つかったような、そんな感じがした。

やがてルーファスの男根が自分の体から出ていくと、コポリと音がして白濁と一緒に初めて男の人を受け入れた印が赤く滲み出た。
（初めてなのに、熱くてお腹が疼いて、乾いた心に水が染み渡るような感じ。凄く幸せな高揚感がする。私の体、どうしちゃったんだろう？）
ぐったりとする私を、ルーファスが自分の体に寄りかからせた。
「アカリ、この感覚が番だ。わかるか？　魂が、心が満たされた感じ。それにアカリの中に生命力を注ぎ込んだことで、怪我の治りも早くなるはずだ」
ルーファスの言葉にコクリと頷く。
（多分、この不思議な高揚感が――満たされている感じが、番の感覚なのかも？）
「よく、わかんないけど……凄く、ギュッってしてほしい」
そう言うと、ルーファスは私をぎゅっと抱き寄せ、貪るようにキスをした。最後にペロリと唇を舐め、小さく何かを唱える。
「【乾燥】」
その一言で、ルーファスと私の体を濡らしていた汗やら何やらが一瞬で消えてしまう。
「魔法……？」
「ああ、オレと番ったからアカリも練習すれば使えるはずだ」

（それは……楽しみ）
ルーファスの声が少しずつ遠ざかっていく。
「アカリ？　気を失ってしまったか……可愛いな」
ルーファスの幸せそうな声が耳に心地よく響いていた。

柔らかな布団の中で目を覚ますと、黒い眼鏡をかけたルーファスが、テーブルに積まれた山のような帳簿と紙束を静かに睨んでいた。
（眼鏡をかけるとイケメン度が上がる……眼福）
幸福感に似た気持ちで見つめていたら、彼の視線が帳簿から私に移った。
「ん。起きたのか、アカリ」
優しく微笑んだルーファスにつられて、少しだけ口元を上げて笑い返す。
「お仕事？」
よじよじと布団から這い出てルーファスに近寄ろうとしたら、手で制された。
「ああ。アカリはまだ寝ていろ」
「ん……」
「食事の準備ができたら起こしてやる」

とろとろと夢の中に誘われていく途中、耳に心地いい声がした。
「ふぅ。オレの番は無防備で可愛いな」
それから温かくて大きな手が、私の頭をゆっくり優しく撫でてくれる。
凄く安心できて、もう独りぼっちじゃない気がして――すぐに眠りにつくことができた。

長い黒髪を編み込んで二つのお団子頭にし、赤い花のかんざしと金色の花のかんざしを付ける。
上は黒い着物で、下は裾の広がった黒いスカート。スカートには白いレースがあしらわれている。その上にエプロンドレスを付けた。
薄く化粧をして耳飾りを付けてもらう。耳飾りには黒色の小さな珠に【刻】と金文字が入れられていて、動くたびにシャリンシャリンと音を立てた。
「はいな。できたよ」
「はいな。完成した」
狐耳の双子の女の子が左右から私にそう言う。
二人は、タマホメとメビナという名の狐獣人で、【刻狼亭】の従業員。料亭のフロン

トとロビーで案内役をしているそうだ。
「ルーファスは先に行ってる」
「ルーファスは仕事行ってる」
二人は声を合わせて同じようなことを言うが、微妙に違うので聞き取りづらい。
私は二人に連れられ、別館から【刻狼亭】の本館に向かう。道行く人達の足元からは、カランコロンと下駄の音が響いている。
「ここは和風なのね」
私が呟くと、前を歩く二人は首を傾げた。
「「わふう？」」
どうやらここでは「和風」とは言わないらしい。自分が着ている着物の上部分を指さして説明してみる。
「こういう、着物みたいな服の多い世界なんだなって……」
「東風ね。ここら辺は東国近いから東風多い」
「東風ね。ここら辺は東国の流れ者多いから」
二人は「ねー」と声を合わせてそう言うと、楽しそうに狐の尻尾を揺らす。
（触りたい、もふもふ……）

やがて見えてきたのは、黒い暖簾に【刻】の文字。
【刻狼亭】の料亭の灯りが、開店していることを告げていた。
「「ただいまー」」
二人は声を揃えて暖簾をくぐり、私もそれに倣う。
フロントにいたルーファスと、銀髪の狐獣人の男性が話をしながら私達に目を向けた。
「「シュテンただいまー」」
挨拶と同時に、タマホメとメビナは嬉しそうに銀髪の狐獣人の足にしがみついた。
「お前ら、まずは若に挨拶しろ」
シュテンと呼ばれた男性は、二人の襟首を掴み、自分から引きはがして溜め息をつく。
「「ルーファスただいま」」
二人が元気よく言うと、ルーファスは小さく頷いた。そして後ろにいる私と目を合わせ、軽く尻尾を振りながら微笑む。
「アカリ、おかえり」
「ただいま……です」
三年ぶりに誰かに「おかえり」を言ってもらったし、「ただいま」を言うことができた。
やっぱり「おかえり」と「ただいま」が言えるのは嬉しい。

「シュテン、この子がオレの番のアカリだ。アカリ、こいつは帳簿の管理や店の従業員の総指揮を務めているシュテンだ。よろしくしてやってくれ」
シュテンは人の好さそうな顔で薄く笑う。
「私はシュテン。店の裏方みたいなものだがよろしく頼む」
「朱里です。よろしくお願いします」
私が頭を下げると耳飾りからシャリンという音が心地よく響き渡る。
「若、『番の儀』も終わったようでよかったですね」
シュテンがそう言い、ルーファスは満足そうに頷いた。
（『番の儀』って……なんでバレてるの!?）
「獣人は鼻がいいんだ。オレからアカリの匂いがしているからな」
私の思っていることがわかったのか、ルーファスが耳元でそっと教えてくれる。そしてそのまま私を抱き寄せ、持ち上げた。
「わっ……」
（何故この人は抱き上げるの!?）
「アカリ、今日は団体客が多くて慌ただしいから、オレの部屋で待っていてくれるか？」
「あの、何かお手伝いしましょうか？」

私の言葉にルーファスは一瞬驚いた顔をするものの、すぐに小さく笑って首を横に振る。
「気持ちは嬉しいが、今はまだゆっくりしていてくれ」
少しの申し訳なさを感じてルーファスの肩に頭を寄せると、頬でスリスリされた。
（居候は心苦しいのだけど……）
「さぁ、お前達は仕事にかかってくれ。オレはアカリを部屋に案内してから戻るとしよう。それまでは任せる」
そう言うと、ルーファスは私を連れてその場をあとにした。

【刻狼亭】の料亭の奥にある、庭園付きの続き部屋。
執務室のような部屋と、給湯室、浴室、トイレがあって、さらに奥には畳の部屋がある。その部屋には箪笥がいくつも並び、着物が衣桁――着物をかける時に使う竿みたいなものにかけられていた。
私が目覚めた時にいたここは、どうやらルーファスの私室らしい。
「この部屋は好きに使ってくれ」
「ルーファスさん、あの、お仕事頑張ってください」

そう伝えると、ルーファスが私の両頬に手を添えて口づけを落とした。歯列を舌でなぞり、舌を絡ませ、私がこくんと唾液を呑み込むまで続けられる。

「……んっ」

「行ってくるアカリ。あと、さん付けはしなくていい」

口づけの長さに息が上がったままルーファスを見つめると、彼は少しだけ困った顔をした。

「そんな顔をされると、どこにも行きたくなくなるな」

ククックッと笑い、最後におでこにキスをして部屋を出ていく。

残された私は、熱くなった頬をもてあましながら唇に手を当てた。

ルーファスの部屋で特にすることもなく、ぼーっと立っていたら、ドアがノックされた。どうしようかと悩んでいる間にドアが開き、一人の女性が入ってくる。

「ああ、アンタだね。若から話を聞いてるよ。従業員用の服は用意が間に合わなかったのかい？　……まあいいか。さぁ、アタシについておいで」

赤い髪を緩く三つ編みにした、気の強そうな顔立ちのその女性は、この料亭の従業員の服を着ている。彼女は私の手を取ると「早く早く」とせかすように部屋から連れ出した。一体どこに行くんだろう？

「アタシはフリウーラ。ここの配膳係だよ」

「あ、はい。朱里です」

ハキハキとしたフリウーラに戸惑いながらもついていく。

「アカリか。東国の名前みたいだね。顔立ちも東国っぽいし」

「はぁ……そうですか……？」

（東国は日本人みたいな人が多いのかな？　着物とかもあるぐらいだし）

フリウーラは私の背中をポンポンと叩いてニッと笑う。

「もっと元気出して。そして笑顔！　これ大事よ？　わかったかい？」

「はぁ……」

私の気のない返事にフリウーラは苦笑いしながら「仕方がないね」と言った。

いきなりすぎてうまく言葉が出てこず、何やら申し訳ない。

「時間がないから簡単に説明するよ。食事の膳はこのカウンターから出る。膳にのっている番号札を見て、番号の場所に運ぶんだ」

フリウーラはそう言って、調理場の横のカウンターに既に並んでいる配膳盆を持つ。さらに私にも料理ののった配膳盆を持たせて歩き出した。

私も配膳係として働くってこと？　さっきルーファスは手伝わなくていいって言ってたけど、やっぱり手が足りなくなったのかな。

「料亭内はどこも同じような場所に見えるだろうけど、そのうち慣れるから焦らずに覚えな。あと木の札に番号が書かれているのは個室、紙に番号が書いてあるのはオープンスペースのテーブルだ。個室はドアの上に、オープンスペースはテーブルに番号が書いてあるから確認して配膳ね」

テキパキと指示を出すフリウーラにコクコクと頷く。

個室の前に着くと、フリウーラがドアをノックし、「失礼致します」と声をかけて開ける。

「お料理をお持ち致しました」

にっこりと笑顔で言い、小声で私に「挨拶」と促した。

「失礼致します」

私も小さく挨拶をする。フリウーラが料理をテーブルの上に並べる。私もそれに倣って並べていった。

「ご注文の品はお揃いでしょうか？」

客の男性二人が静かに頷くのを確認してから、フリウーラと一緒に退室した。

「こんな感じさ。わかったかい？」

うまくできるか不安はあるけど、難しくはない。そう思って頷いた。

「大丈夫。わからなくなったらアタシや他の従業員に聞けばいい。しっかり頑張んな」

フリウーラは私の背中をポンポンと叩くと、「次行くよ」と言って歩き出した。

何度かフリウーラに付き添ってもらったあと、「もう大丈夫そうだね」と言われ、自分一人で配膳をすることになった。

緊張しつつも調理場のカウンターへ行き、新しい配膳盆を受け取ると、指定された個室に料理を運んでいく。

個室のドアを叩き「失礼致します」と扉を開けた瞬間、喉に鈍い痛みが走った。倒れそうになるのを必死で堪え、なんとかテーブルに配膳盆をのせる。器がガチャンと音を立てた。

何が起きたのかわからないまま目線を上げる。骨ばった若い男性と太めの男性が、こちらを見て意地の悪そうな顔で笑っていた。

痛む喉に手をやると、そこに何かがぶら下がっている。

（……何これ？）

手で取る前にボトリとそれが床に落ちた。

それはシューッと音を上げながら骨ばった男性客の腕に巻き付いていく。――蛇だ。

「きゃあっ！」
思わず悲鳴を上げると、男性達は笑い声を上げた。
「きゃあだって。ほらお姉さん、毒を抜いてあげるからこっちにおいでよ」
（毒……？）
骨ばった手が近付いてくる。
「解毒剤は俺の口の中にあるからさ、お姉さんの首に吸いついて解毒してやるよ」
男に腕を掴まれ、引き寄せられる。先程テーブルにおいた配膳盆に腕がひっかかり、ガシャーンと大きな音を立てて料理が床に散らばった。
（お料理が……ああ、どうしよう）
「あーあ、食えないじゃん」
「どーすんの？　お姉さん」
男性達が揶揄するように声を上げる。
そうしている間にも、蛇に噛まれた喉は痛みを増していく。心臓も異様なほどドクンドクンと音を立てていた。
青ざめる私の腕をさらに引き寄せて、男が首筋に唇を這わせようとする。
ぬらぬらした男の口に鳥肌が立った。

「嫌ッ!!　気持ち悪い!!」
男を突き飛ばし、個室から逃げようと一歩踏み出した瞬間、その場に私は膝をついた。足に力が入らない。
こぽっ。ぽたたた……
口から血が滴り落ちる。
（何……？　喉、熱い……）
男に肩を掴まれ、振り向かされる。私を見た男達は一気に目を見開き、青ざめた。
「おいっ死にかけてるぞ！　これ、そんなに強い毒じゃないはずだろ!?」
男の一人が慌てたように私を突き飛ばして逃げる。残った男も慌てて逃げていった。
ドタドタという足音を聞きながら、必死に助けを呼ぼうとする。
「だ……ゴホッ、ゴホッ……あっ……」
（誰か、助けて……ルーファス……）
ぐにゃりと回る視界。がむしゃらに手を伸ばし、テーブルにのっていた酒器を床に落とす。
ガシャーンと響いた音で誰かが気付いてくれることを祈りながら、私は意識を手放した。

立ち読みサンプルはここまで